



目次

●狂愛の洗礼【催淫触手/放置/腹ボコ/潮吹き/失神 /連続絶頂】	3
■不穩の影.....	17
●巨蛇に開かれた純潔【処女開通/腹ボコ/潮吹 き】	49
●挿入あり / ○挿入なし / ■性描写なし	

※サンプル版です。

●狂愛の洗礼【催淫触手/放置/腹ボコ/潮吹き/失神/連続絶頂】

暗湿な室内を照らしているのは、壁一面を埋め尽くすいくつものモニターの青白い光だけだった。

床や机の上には、機械と生体が融合した拷問具のような器具や、怪しい粘液に満たされたガラス瓶が転がり、異臭を放っている。

室内の一角に置かれた、大人が一人隠れられそうなほど大きな漆黒の箱。

その狭い密閉空間のなかで、星野陽は膝を抱え、まるで胎児のように小さく体を丸めた姿で閉じ込められていた。

剥き出しにされた若く柔らかな肢体。

その白く華奢な首筋には、無機質な金属製の首輪が固く嵌め込まれ、黒く歪んだ光沢を放っている。

内側の壁には、気味の悪い粘液を纏った肉厚な触手がびっしりと敷き詰められていた。

内部に閉じ込められた少年の悲痛な呻きは、触手が口内へとねじ込まれたことで、濁った水音にかき消される。

ゴチュ♡ゴチュッ♡ゴチュ♡ゴチュッ♡ゴチュ♡ゴチュッ♡ゴ
チュッ♡ズボッ♡ズボッ♡ズボッ♡ズボッ♡ぐちゅりッ♡

「おっ、……ご、お……ッ……っ！」

ズリ……ズリズリッ……♡ぐちゃっ♡ぐちゅっ♡ぐじゅっ
っ♡♡どちゅうっっ♡♡♡

「おっ オッ？！ぐっ♡おっ、むぐうっ うううううううっ
♡♡♡」

ビクビクッ♡ガクガクガクッ♡プシッ、プシャアアアア
アッッッ♡♡♡

ぬちっぬちっ……♡ぬちちっ……♡ずりゅっ……♡ずりゅうう
っ……♡♡

「んうっ うッ……♡むぐうッ……っ♡♡んう、ふうう……ッ、
ンうッ……♡♡」

狭く暗い箱の中で、触手たちが水音を立てて蠢くたび、陽のか
細い呻き声が漏れる。

口内には触手が潜り込み、舌を絡め取るようにして奥まで塞い
でおり、時折甘い蜜を喉奥に流し込む。

「んっ……っぐ、ふうーっ……♡ん、むうう……っ♡♡」

鼻から抜ける甘く情けない喘ぎ声だけが、密閉された箱の中に虚しく反響していた。

ズルルッ、ちゅぶちゅぶ……っ、ぴちゃっ♡

無数の細い触手は、陽の開いた口腔から溢れ出る熱い唾液、過敏になった蜜孔からダラダラと滴り落ちる愛液、そして皮膚から滲み出る分泌液に吸い付き、ぷっくりと硬く膨らんだ乳首や芯を持ったの淫芽を弄ぶように、いやらしい音を立てて吸い上げる。

ジュ、ジュルルッ……♡ジュチュッッ、ジュルッ……♡♡♡

「んんうーッ！？♡むぐううっ♡んンー……っ♡♡」

体液を吸り上げられる異質な感触と引き換えに、強烈な痺れと快楽が全身の神経を駆け抜ける。

陽の身体は一層激しく痙攣し、箱の壁面に背中を打ち付けながら跳ね上がった。一層陽の身体から液が溢れる。

それを喜んで無数の小さな触手がイソギンチャクのようにぞわぞわと陽の身体に張り付いては吸り上げる。

「うゝっ♡うううゝンううううっ♡」

ヌルッ、ぬぼ……、くちゅり♡

耳孔や下半身の狭い肉孔にまで侵入した極細の触手たちが、内壁のヒダを撫で回しながら一定のリズムで粘液を吐き出していく。

ぴちゃ、ぴちゃり……っ♡ズルッ、ズルッ♡ぐちゅ……っ♡

とぷとぷとぷっっ……♡

全身を覆う無数の吸盤が吸いついては離れるたび、過剰な性感帯へと変貌した身体が歓喜する。

ビクンッ♡……ヒクッ、ヒクッ♡♡

(また、くるうう……っ♡しゅごいのっ、くりゅう……っ♡♡♡)

「ふうっ、ふうーっ……っ♡うゝ、うゝーっ！♡むぐううゝっ♡♡」

声にならない悲哀と快楽の混ざり合った喘ぎが鼻腔から漏れ出し、高熱を発する吐息となって暗闇を満たしていく。

密閉された空間に充満するその匂いは、獲物を誘い込む食虫植物の蜜のように妖しく甘い。

だがその奥には、熟しきって爛れた花卉のような生臭さと、吸い込んだ人間の正気を内側から溶かす狂おしい催淫の毒が潜んでいた。全身の性感帯が甘やかに痺れていく。

胸元には細い触手が何本も巻きつき、ぷっくりと極限まで腫れ上がった両の乳首を、逃がさぬようギリギリと締め上げていた。

さらには先端の小さな孔にまで細い触手の先が潜り込み、内側から直接、甘い分泌液を注入しながら蠢いている。

涙と涎、そして股間から溢れ出した大量の汁は触手にすすられたのかそれとも触手の粘液と混ざり合ったのかすら判断がつかない。

「ううううッ♡♡お`♡んッ♡オ` おおおおン`っ♡♡」

ビクッ♡ビククッ♡ガクガクガクガクッッ♡♡

限界を超えた快楽の過負荷に、視界がぐにゃりと歪んでいく。

(むり……むりいい……っ♡じぬうううう♡♡)

すうっと意識が遠のき、暗闇の底へと落ちかけ、その瞬間。

ズデュンッッッ！！♡♡♡♡

「むぐうッ！？♡♡うゝっ、うゝうーっ！！♡♡」

甘えなど一切許さないとばかりに、蜜孔の奥深くへ潜り込んだ触手が一気に太さを増し、全神経を激しく掻き毟るように蠢いた。

脳に直接針を刺されたかのような強烈な刺激が走り、落ちかけた意識が強制的に叩き起こされる。

何度も失神しかけては快樂の注入で起こされ、思考すら麻痺していく。

そうしてどれほどの時が過ぎたかも分からなくなった頃。

ゴトンッ、と重厚な蓋が開け放たれる。

箱の中に液晶の光が差し込み、陽は久方ぶりの光のまぶしさに目を細めた。

同時に、閉じ込められていた濃密な粘液の匂いとなまめかしい水音が室内へと溢れ出した。

視界を遮るように立ち塞がっていたのは、信じがたいほど巨大な影。天井に届かんばかりに縦へとしなやかに伸長した、異様に高い身長。

ギガ・ネビュラの幹部『ヨルムンガンド』

骨ばった異形の巨躯、まるで幽鬼のような陰気な威容で箱を見下ろす彼の双眸には、ただの捕虜に対するものとは思えない、ドロリとした得体の知れない歪んだ執着が宿っていた。

「やあ、陽、……反省したかい？」

「ひっ……！ や、あゝ あ……っ！」

全裸で硬く太くそそり立つ巨根を無造作にむき出しにしながら、ヨルムンガンドは箱の中で蠢く触手を雑に払いのけると、

粘液に塗れてグチャグチャに開発し尽くされた陽の体を、まるで仔猫でも扱うように軽々と抱き起こした。

大人と子供どころではない圧倒的な体格差。

触手によって拡張されっぱなしの蜜孔がぽっかりと開き、そこから溜まっていた熱い粘液がどろどろと音を立てて床へと垂れ落ちる。

「あゝっ……、おゝッ、は、ひいいいつ……あ♡あゝ ああああ
ああっお、おゝッ……♡」

ただ抱き上げられ、皮膚が擦れ合う衝撃だけで、過敏になりすぎた全身の神経に快楽が激しく奔る。

しかし、度重なる連続絶頂によって脳のキャパシティは限界を超え、陽にはもはや抵抗する気力は欠片も残っていなかった。まともに力が入らず、首を脱力させたままガクガクと小さく痙攣を繰り返すばかり。

焦点の定まらない虚ろな瞳からは止めどなく涙が溢れ、口元からは口孔を塞がれていた名残の唾液が糸を引いてだらだらと垂れ落ちていた。

「……ねえ、どこ見てるの？ 僕を見てよ、陽」

その瞳には光がなく、焦点すら合っていない。

放心し切った陽の態度に、冷やかな声とともに、ヨルムンガンドの巨大な指先が、陽のぼってりと真っ赤に腫れ上がった右の乳首を捉えた。

そしてぎゅうううっと、ちぎらんばかりの力で強く引っ張り上げる。

「ひぎゃあああああッッ！？♡♡」

弾けたような衝撃に陽はつんざくような甲高い悲鳴を上げながら、限界まで過敏になった尿道口から、溜まりに溜まった透明な潮がプシャリと勢いよく噴き出した。

身体が跳ね、あまりの快樂の暴力に呼吸すら満足にできなくなる。

「乳首引っ張られただけでこんなに噴くなんて、えっちな身体になっちゃったねえ」

「はっ……あっ……♡ひゅ……っ、は、あ……っ……！お、もういやあ……っ！ゆうしてっ…♡…やめえ……ッ！」

涙でぐちゃぐちゃの顔で、ヨルムンガンドの腕の中で一心不乱に身じろぎしながら許しを乞う陽、その間も肌と肌が触れ合う度に敏感になった身体は刺激され続ける。

ヒーローとしての強がりもプライドもどこへやら、ただの哀れな陽の頭を、ヨルムンガンドは愛おしそうに撫でまわす。

「許して、じゃないでしょ？……『お兄ちゃん、ごめんなさい』は？」

「っ……！う、ううっ……ッ！」

「ほら、お兄ちゃんって呼びなさい。言えたら、もっと気持ちよくしてあげるからさ」

「ご、ごべッ……ごめ、ごめ、ンらしゃいゝっ……！ごべ、りゃ、しゃいいい……ッ♡」

「違うよ、『お兄ちゃん』でしょ？ふふふ、此処も直ぐ突っ込めそうだね♡」

「ヤッ、いやあああゝあゝッ…ッや、やえへえっ、もういやあああつつ」

陽は涙で視界を濡らしながら、首を左右に激しく振り乱した。

どうにか逃げようと必死に体を振らせる。

覆いかぶさってくるヨルムンガンドの胸元へと必死に爪を立て、
縋りつくような体勢で押し返そうと足掻く。

だが、快樂で脱力した腕には力など入るはずもない。

引っ掻くことすらできず、胸元を無力になぞるような擦れる抵抗にしかなかった。

「はいはいっ、駄々っ子な陽も可愛いねえ。仕方ないよね。これも教育だから、お兄ちゃんも、陽にはもっと優しくしてあげたいんだ」

ヨルムンガンドは優しく言い聞かせるように、陽のヒクヒクと開閉を繰り返す蜜孔をくばりと広げると、自身の凶悪な怒張を一気に根元まで突き立てた。

ドスツツツツ♡♡ごちゅんツツツツツツ♡

「ひぐあッ！？♡♡あッ、あああッ……！！♡♡」

貫かれた瞬間、陽の肢体は弾かれたように爪先まで突っ張り、
体中の筋肉がビクビクと激しく痙攣する。

足をバタつかせて拒もうとするものの、腰を太い腕でガッシリと固定され、逃げることも叶わない。

「ほらっ、お兄ちゃんだよ。お兄ちゃんって言いながら腰を振りなさい♡」

ぐじゅっ……♡ごちゅっ♡ぐちゅっ♡どちゅんっ♡どちゅん♡
どちゅんっ♡♡

「いやあああゝ……やめへえ、イヤああああ♡とまって……あゝ♡うあっ、あアゝ～～っ♡」

「陽はいい子だから、お兄ちゃんの言ってること分かるよね？」

ゴッ！ゴッ！ゴッ♡ドスッ！ドスッッッ！！ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅんっっ♡♡

「あゝ、ぎっ♡あゝッ♡おゝ、おにい……っ♡おゝ おにい、ちゝや、あゝ あッッ♡♡あ、あゝっ♡あっ……！いぎゅっ♡いぎゅううううッ！！♡♡♡」

ぶしゃあああああッ♡ガクガクガクガクッッッ♡♡♡

嵌められた首輪を引き絞られ、上体を引き起こされた姿勢のまま、巨根に胎の最奥をドスドスと殴りつけられる。

先端が子宮口を穿ち、奥へ奥へと潜り込むたび、陽の小柄で滑らかな腹部が、内側からグニャリと不自然な形に盛り上がった。

埋め込まれた規格外の巨塊が蠢くたび、平坦な腹がぼこり、ぼこりと歪み、外からでもモノの輪郭がはっきりと浮かび上がる。

最奥の弱点を何度も強情に削り上げられ、脳みそまで蕩けるような快楽に耐えきれなくなった陽の体は大きく跳ね上がり、大量の液体を撒き散らしながら絶頂した。

ビクッ！ビクククッ……ガクガクガクッ！！

一度果てた直後の過敏すぎる肉壁を容赦なく擦り上げられ、絶頂の波が引く間もなく、ヨルムンガンドはピストンを止めるどころか、さらに速度を上げて凶器のような巨根を最奥へと叩き込み続けた。

爪先まで突っ張った足指が虚しく空を搔き、イキっぱなしの体躯は跳ね回る。

ドスッ！ドスッ！ドスッ！ドスッ！ごちゅ♡ごちゅ♡どちゅ♡
どちゅ♡ぐちゅううッ♡♡

「ひぁゝ ああああつつ♡やあああッ♡まってゝ えっ、まゝっ
へえ♡……うぁゝ、あ〜〜〜っ♡♡♡」

「全くもう、お兄ちゃんを差し置いて一人だけ気持ちよくなっ
ちゃって……陽は悪い子だね？」

甘く、けれど、ぞっとするほど陰湿な声が耳元で囁かれる。

「悪い子には、もっとたっぷりお兄ちゃんの愛情を注ぎ込んで
あげないとね……♡」

「ひっ、いやぁゝ アあああつつ、ひぎいいッ！らめえッ♡あ、
ひいいっ、……あゝ ああつつ♡あ、アゝ ツぐう♡まだっ、い
ぐつつ、いゝ ぐううう〜〜っ♡♡♡」

休まることのない子宮への叩打に、喉を擦り切らせて泣き叫ぶ。

ねっとりとした湿り気のある怪物の陰湿な囁きと激しい肉突の音だ
けが、絶頂に狂う頭の中にいつまでも響き続けていた。

■不穩の影

星野陽にとって、小学生に上がる前までの世界は、甘くて温かい砂糖菓子のようなものだった。

「もう、陽は本当にいたずらっ子ねえ」

「ははは、陽は仕方のないやつだな。ほら、ピーマン残してないでこれなら食べられるか？」

夕食のテーブルには、いつも自分の好物が並んでいた。

多少の好き嫌いをして駄々をこねても、お気に入りのおもちゃを放り出してリビングを散らかしても、両親は決して陽を強くは叱らなかった。

陽が屈託のない人懐っこい笑顔に向け、ごめんなさいと首を傾げてみせれば、大抵のことは笑顔で許された。

頭を撫でてくれる父親の大きな手の温もり。

抱きしめてくれる母親から漂う、甘いお日様の匂い。

世界は自分を中心に回っていて、自分は愛されるために生まれてきたのだと疑いもしなかった。

社交的で、朗らかで、誰からも愛される可愛らしい子供。

それこそが星野陽という存在のすべてであり、永遠に続くはずの幸福な日常だった。

けれど、その温かい食卓の片隅には、いつもひっそりと暗く冷たい影が伸びていた。

年の離れた、実の兄。

背が高く常に猫背で深く俯いている兄は、幼い陽にとって存在そのものが恐怖であり、威圧感の塊だった。

何を考えているのか分からない。同じ家に住んでいるはずなのに、兄が纏う空気だけが、まるで別の世界から混じり込んできた不協和音のように気味が悪かった。

家族4人で囲む食卓でも、兄が会話に入ってくることはなかった。両親が陽をちやほやと甘やかし、陽が今日あった出来事を嬉しそうに話している間も、兄はただ黙々と、機械のように淡々と箸を動かしているだけだった。

家の中で、兄の声すらほとんど聞いた覚えがない。

しかし兄は下を向いたまま、前髪の間から、じっと、視線を陽に注ぎ続けていたのだ。

言葉を発することも、表情を変えることもなく、ただ暗い瞳で自分の一挙一動を凝視している。

その熱を孕んだ粘着質な眼光に気づくたび、陽の小さな背中に寒気が走った。

気味が悪い。怖い。見ないでほしい。

陽は子供心にその恐怖から逃れるように、食事の席では絶対に兄と視線を合わせまいと、必死に両親の顔だけを見つめていたのだった。

だから、ある日突然、兄が全寮制の学校に行くからと家を出て行ったとき、陽は心の底から安堵した。

兄が居なくなった家は、陽にとって楽園そのものだった。

もうあの気味が悪くて不気味な『のっぽ』に怯える必要はない。

自分を愛してくれる両親と、自分だけの温かい世界。

幼い陽は無邪気にその幸福を噛みしめていたのだ。

だが、その平穏は、あまりにも唐突に終わりを告げた。

「……お兄ちゃんが、死んだ……？」

ある日、家にもたらされた訃報。

当時の幼い陽には、『死』という概念すら満足に理解できていなかった。

ただ一つ分かったのは、その日を境に、優しかった両親の笑顔が消え去ってしまったということだけだった。

「陽、今日からあなたはお兄ちゃんの代わりに勉強するの。ほら、これがお兄ちゃんの使っていた参考書よ。早くやりなさい」

「どうしてこんな簡単な問題も解けないんだ！兄さんはお前くらいの年齢の時には、もう高校レベルの計算を解いていたんだぞ！」

昨日まで、散々陽を甘やかしていた両親の顔は、見たこともないほど鬼気迫る表情へと変貌していた。

陽は、その日から『死んだ優秀な兄の身代わり』となったのだった。

どれだけ必死に机に向かっても、両親から甘やかされて育ち、もともと勉強が苦手な陽には、兄の残した実績に追いつけるはずもなかった。

両親の愛を取り戻したい一心で、幼い頭を悩めながら必死に鉛筆を握り続けた。だが、すぐに成果が出るはずもない。

テストの点数を見るたび、両親からは激しい叱責が飛んだ。

やがて怒声すら途絶えると、残されたのは冷え切った溜息と、一切合わなくなった視線だった。

少し前まで自分を包み込んでいた愛のすべてが、今はない、両親の関心は陽からあの陰気で怖かった兄の『幻影』へと注がれた。

「おとうさん、おかあさん……お願いだから、見てよ……俺を見てよ……っ！」

いくら声を張り上げても、必死に服の裾を引っ張っても、両親の瞳に陽の姿が映ることは二度となかった。

世間に後ろ指を指されない程度に、必要最低限の衣食住を与え、親としての形だけの義務を果たすだけ。

体調を崩せば病院へ連れて行き、決まった時間に食事を出し、学費を払う。

けれど、そこには感情の通った会話も、温かい眼差しも、過去にあった抱擁も何ひとつ存在しなかった。

透明になってしまったかのように、両親は陽の存在そのものを不自然なほど無視するようになった。

陽の脳裏に、すっかり風化しかけていた幼い頃の記憶がかすかに蘇った。

（そうだ、まだお兄ちゃんが家にいた頃……俺が転んで、膝を派手にすりむいて泣いた時……。

おとうさんも、おかあさんも、顔色を変えて駆け寄ってきて、泣きそうな顔で俺を抱きしめてくれた。

『痛い痛い飛んでいけ』って、何度も頭を撫でてくれた……。あの時は確かに、俺のことだけを見て、愛してくれていたんだ)

あの温もりを、もう一度だけでいいから取り戻したい。

あの頃のように『大丈夫か』と心配して、抱きしめてほしい。

そう思い詰めた陽は、小学校の敷地内、裏庭の片隅にある高い塀の上へと登った。高所への恐怖に足が震える。

けれど、あの温かい抱擁を思い出し、陽は祈るような気持ちで、ためらいなくの地面へ飛び降りた。

バキリッ、と鈍い音が足首から響く。

「う、あ……あ、あああッ……！！」

経験したことのない激痛が身体を突き抜け、陽は涙と鼻水をボロボロとこぼしながら地面に丸まり、悶絶した。

保健室に担ぎ込まれ、すぐに両親へと連絡がいった。

先生たちが「大丈夫か」「痛むか」と心配そうに見守る中、やがて学校へ駆けつけてきた母親は、申し訳なさそうな理想の母親の顔をしてペコペコと頭を下げた。

「すみません先生、うちの子が不注意でお騒がせしてしまって……本当に申し訳ありません」

先生たちの前で陽を叱ることは一切なかった。

痛みに震える陽の肩に手を置き、優しく撫でてさえた。

けれど学校を出て、二人きりになった途端、その温もりは氷のように冷たく凝固した。

駐車場に停められた自家用車、後部座席に陽を押し込むと、カチャリ、と無機質な電子音を立ててドアロックが下りる。

密室になった瞬間、運転席のシートが軋み、母親が般若のような顔で振り返った。

「あんた、自分で塀から飛び降りたんですって！？一体なんのつもりよ！！」

鼓膜を突き刺すような金切り声が、狭い車内に響き渡る。

かつて優しく自分を抱きしめてくれた母親の面影は微塵もない。

ヒステリックに吊り上がった目が、刃物のような鋭さで陽を射抜いていた。

「嫌がらせのつもり！？あそこの進学校に入るための大事な時期なのよ！塾の夏期講習だって詰まってるの！なんで余計なこととしておかあさんの足を引っ張るのよ！いい加減にして！！そんなんにお母さんのことを困らせたいの？！」

「……ご、めんな……さい……っ、ごめ……っ」

喉の奥がヒィヒィと引きつり、呼吸すら上手くできなくなる。

見てほしかった。痛いよと泣く自分を心配して、昔みたいに抱きしめてほしかった。ただ、それだけだったのに。

母親の目に映っているのは、骨の折れた陽の足でも、苦しみに歪む顔でもない。

計画を狂わせた、出来損ないへの激しい苛立ちと不快感だけだった。

「……っ、う、あ……っ」

足首が、ズキンズキンと熱を持って脈打つように激しく痛む。

応急処置をされただけの骨折の痛みの何倍も、車内の冷え切った沈黙と、バックミラー越しに向けられる母親の心底蔑むような拒絶の視線が、幼い陽の心を何重にも深く、切り裂いていったのだった。



「かんばーい！」

プラスチックのコップがチープな音を立てて合わさる。

テーブルの中央には、油でギトギトに輝く山盛りのフライドポテトと、山盛りの唐揚げがドンと鎮座していた。

カラフルなミラーボールが壁を照らし、重い防音扉の向こうからは、隣室から漏れ出る重低音がかすかに床を揺らしている。

陽はコーラを豪快にぐいっと飲み干すと、メニューのタッチパネルをソファの脇に投げ出した。

「やっぱり密談つつたらここだよな！ここならどんな大声で喋っても外には聞こえねえし」

「ちょっと陽、こんなに沢山……何頼んでんだよ。真面目な話しようって集まったのにさ……」

春馬が呆れたように、おしぼりで指先を拭う。

その傍らで、メロンソーダのグラスを両手で大事そうに持っていた碧が、おずおずと口を開いた。

「あの、陽くん……。こんな油っぽいものを食べたら、栄養のバランスが崩れますし、消化にも悪いです。それに夕ご飯が食べられなくなってしまうですよ？」

「碧……お前、なんかたまに『おかん』の波動感じるんだよな。まあ細かいことは気にすんな！腹が減っては戦はできぬ！ほら食べよ！美味しいぞこれ」

陽は揚げたてのポテトを一本つまむと「ほら、あーん」と碧の口元へ強引に突きつけた。

碧は一瞬、おびえるように身を引いたものの、陽の屈託のない笑顔に押されるようにして、恐る恐るそれを口に含む。

もぐもぐと咀嚼した瞬間、碧の大きな瞳がぱっと輝いた。

「……！お、美味しい……です、これ！外側がサクサクして
て、適度な塩分が脂質と合わさって……！」

「だろ！？揚げたてが一番美味いんだよ！ほらもっと食べ、皿
ごとやるから！」

デンモクを操作していた春馬が、手元の液晶を見つめたまま小
さく笑う。

「あーあ、餌付けされちゃって……。っっていうか碧、せっかく
カラオケ来たんだからなんか歌いなよ。履歴から適当に選んで
いいからさ」

「えっ、あ、ごめんなさい……。僕、流行りの歌とか全然知ら
なくて……。スマホも親のペアレンタルコントロールでガチガ
チに制限されていますし……」

「ぺ、ペアレ……。？なんて？ペヤングの新しい味か？」

「違うわバカ。親が子供のスマホの機能とか、動画を制限する
やつ。で、碧は何観てるの？」

「は、はい。母がプレイリストに入れた TED のプレゼン動画と……あ、アニメは『にゃんこ日本史』だけは視聴を許されていたんですけど……」

「……てっど？にゃんこ……なに？」

あまりに予想外なワードの連続に、ポテトを口に運ぼうとしていた陽の手がピタリと止まる。

「TED に『にゃんこ日本史』って……それ、教育系と学習用のアニメじゃん。息が詰まりそうなんだけど、どういう家庭環境だよ……」

「もっとこうさあ！楽しいやつとかねえの！？ちいさくて可愛いやつとか、妖怪が体操するやつとか見ないわけ！？」

「ちい……？にゃんこ日本史も、猫ちゃんたちがとても可愛いですよ……？」

「いや、可愛いかもしれないけどさ……。普通の男子高校生はもっとこう、流行りのバンドとか、もっとスカっとするようなアニメ観るじゃん。天然記念物かよ……」

陽は引き気味に呟いたが、すぐに碧の皿に唐揚げをポンと乗せた。

「まあ歌は後だ！とりあえず今は食おうぜ！」

「はい……！ありがとうございます……！」

嬉しそうに唐揚げを口に運ぶ碧。

その無邪気で平和な光景とは裏腹に、テーブルの片隅には、電源を切られ、バッテリーまで抜かれた3台のスマートフォンが、重なり合うように転がっていた。ここには、組織の監視もない。

陽はコーラのコップをテーブルに置くと、それまでの笑みをかき消し、真剣な眼差しで二人を見つめた。

「……で、本題だけどさ。悠緋と蒼士の件、どう思う？」

その言葉に、部屋の空気が一気に張り詰める。

「いや、どう考えても怪しいだろ」

春馬が膝の上で拳を握りしめ、低い声で吐き捨てた。その言葉を引き継ぐように、陽が身を乗り出す。

「だろ！？『特別任務』なんて理由で急に新メンバーが入ってくるとか、意味がわかんねえよ。気になって俺、管理官に直接聞きに行ったんだよ。

そしたら『お前たちは余計なことを考えるな、大人しく指示に従ってればいい』の一点張りだぜ？隠し事してますって顔に書いてあるようなもんじゃねえか」

「セイバーズで死亡者が出たことは一度もないって、入隊のときに上の奴ら言ってたよな……？」

春馬がすぎるような目線を碧に向ける。

碧は油でテカテカになった口元を紙ナプキンで上品に拭うと、眼鏡の位置を直した。

「……『死亡者』は、確かに存在しないと言っていました。

配られた資料にも明記されていましたが……『行方不明者』については、彼らは一度も言及していません。つまり」

「……そういうことかよ。マジか……」

陽が頭を抱える。彼らは5人で戦隊ヒーロー【セイバーズ】だ。

過酷な運命を背負わされ、親にすら道具のように差し出された少年たちが、知り合ってから日は浅いが、唯一、背中を預け合える本物の仲間だった。

「どうしても、悠緋と蒼士が、任務を放棄して2人で逃げ出したとは考えられません」

碧の声が、悲痛に震える。

「俺もそう思う、あのクソ真面目な悠緋が、俺たちを置いて逃げるわけねえ、蒼士だって……そんな薄情なヤツらじゃないだろ」

「特衛さ、絶対、何か隠してるよ。俺たちも……もしかしたら……いや、なんでもない」

春馬がそこまで言いかけて、言葉を飲み込んだ。

『俺たちも、悠緋や蒼士のように行方不明になるのではないか』

そんな恐ろしい仮定が頭をよぎったが、それを口にする勇気は、なかった。居場所を失うことの恐怖を、春馬は誰よりも知っている。

重苦しい沈黙を破ったのは、碧だった。

「……知らないより、知っていた方がいいと思うんです。だから……僕、特衛のデータベースを探ってみます」

「碧、そんなこと出来るのか！？すげえな！」

碧は少し視線を泳がせながら、小さく頷いた。

「実家のパソコンは制限されていましたが……学校の機材と、特衛から支給された端末のポートをバイパスすれば、あるいは。僕たちの機密保持契約の隙間を縫って、中枢データにアクセスできるかもしれません。やってみるだけです」

「いや、マジで助かる！頼むわ、碧！」

「あまり期待しないでくださいね。……あの、陽くん。ポテト、もう一ついただいてもいいですか？」

「おう！全部食べ！お前のために揚げたて追加で頼んでやるよ！」

陽の言葉に、碧はほんの少しだけ、安心したように目を細めた。



カラオケボックスでの密談から数日後、

深夜、防衛組織が管理する防衛隊員用の個室寮、その一室で、
3人は碧のデスクに置かれた私物ノート PC の液晶画面を凝視
していた。

部屋の明かりは落とされ、画面から放たれる青白い光だけが、
彼等の緊張した顔を照らしている。

碧のキーボードを叩く指が、神がかった速度で動き、いくつか
のセキュリティウォールをすり抜けていく。

親からの徹底的なデジタル管理を逆手に取り、抜け道を模索し
続けた彼ならではの、執念とも言えるハッキング技術だった。

「……アクセス、成功しました。特衛の『アセット個別管理ス
テータス』です。ここから、暗号化された内部ログをデコード
します……」

碧が最後のリターンキーを強く叩いた。

画面のノイズが一瞬だけ走り、緑色の英数字の羅列が日本語に
変換される。

そこに表示された情報を見た瞬間、3人の背筋を冷たいものが駆け抜けた。

【登録番号：A-H-01/大和悠緋】

ステータス：KIA（戦死）

処置：除籍済

【登録番号：A-H-02/巽蒼士】

ステータス：KIA（戦死）

処置：除籍済

「待ってください！……これ……っ」

碧は息を呑み、動揺を隠せない声をあげて、春馬の肩を掴んだ。

その指先は目に見えて激しく震えている。

「死んだ……？悠緋と蒼士が、戦死って……そんなわけない。遺体だって上がってないし、俺らには行方不明って言ってたのに！なんで……なんでこんなに簡単に、もう死んだことになってるの！？」

「……酷い、です。搜索のログすら、数日前に打ち切られています。まるで……最初から、いなかったものとして扱われているみたいで」

2人が消えた後も、組織の上層部は平然としていた。

『2人は長期任務だ』と世間を騙し、代わりのスぺアを探しながら、陽たちには『気にするな』とだけ言い放った。

その理由が、この画面に示されていた。

「……あいつら、俺たちをなんだと思ってんだよ」

陽が、これまでにないほど低く、怒りに震える声で呟く。

その時、液晶画面の最下部、戦死報告書の添付データに、奇妙なノイズ混じりの座標コードが点滅した。

[ALERT]最終微弱信号検出セクター：35.XXXX,139.XXXX

[STATUS]未確認地下セクター（アクセス制限領域）

「こって……」

春馬が息を呑む。

「……2人が消えた、最後の場所です。本来なら特衛のレーダーには映らないはずの、地下の、さらに奥深くの座標……」

「……行こう」

陽が、迷うことなく真っ先に意思を示した。

いつものお調子者な雰囲気は微塵もなく、その眼光には鋭い決意が宿っている。

「ちょっと、待ってって！」

春馬が慌てて陽の肩を掴んで引き留めた。

「罨かもしれないだろ。普通に考えて怪しすぎる。碧、お前もそう思うだろ！？」

「……そ、それは……確かに罨の可能性は……高いです。でも……特衛も、もう信用できません。僕たちは、このまま何も知らずにあの寮に住んでいていいんでしょうか……？次は、僕たちの番かもしれないのに」

碧は自嘲気味に、ぎゅっと自分の拳を握りしめた。

受験関係で母親に縛られ、逃げるためにこの戦隊に入った。

だが、ここもまた、自分を縛り監視しているのだ。

それにいつ『誰に』殺されるか分からない。

「……それは……そうだけど」

春馬が言葉を詰まらせる。家に居場所がない自分にとって、特衛は唯一の避難所だった。だが、そこが底なしの蟻地獄だったという現実を直ぐには信じられない。いや、信じたくないのだ。

「俺一人で行くからいいよ」

陽は2人の葛藤を察したように、あえて軽く笑って見せた。

「ちょっと様子見に行って、危なそうだったらすぐに戻ってくる。大丈夫だって」

「それはダメです！」

碧が強い口調で、陽の言葉を遮った。

「二人は……悠緋も蒼士も、一人きりの時にいなくなったんですよ。もしそこが敵の根城なら、一人で行くのは自殺行為です。僕も行きます。陽くんを、一人で行かせられません」

「碧……」

陽が目を見張る。不器用で、いつも親の顔色を伺って怯えていたはずの碧が、自分を守るために真っ直ぐな目で立ちはだかっていた。

春馬は、そんな2人の姿を見て、大きくため息をついた。自分の髪をくしゃくしゃとかき回す。

「……はあ……。仕方ないか……。最近、不可解なことばかりで、いい加減、気味が悪かったんだ。置いていかれるのも癪だし、俺も行くよ」

深く溜息を吐いて、春馬は陽と碧の肩を叩いた。

「3人いれば、何とかなるんじゃない？ さっさと2人を連れ戻して、この最悪な組織とおさらばしてやろうよ」

「……春馬、お前……」

「そうと決まれば、準備しましょう。支給されたスーツとデバイスのGPS機能は、僕がこのPCからダミーデータを送ってごまかして……僕たちの位置情報は、今も寮の自室にあるように偽装します」

碧がテキパキとキーボードを叩き、偽装プログラムを展開していく。その横顔には、もう迷いはなかった。

「よし。じゃあ、サクッと2人を助けて帰ってくるぞ！」

陽が拳を突き出す。それに、碧と春馬が躊躇いがちに、けれどしっかりと自分の拳を重ねた。

彼らは静まり返った深夜の寮から、夜闇に紛れて駆け出していった。



「はあ、はあ……っ、こっちだ！碧、春馬、遅れるなよ！」

陽は、手にした懐中電灯の細い光で暗闇を切り裂きながら、カビ臭い地下の階段を駆け下りていく。

アスファルトの地上とは一変し、地下は不気味なほど静まり返っていた。滴り落ちる水の音だけが、コンクリートの壁に反響して鼓膜を打つ。

「待って、陽くん……！少し、ペースが早すぎます……っ」

碧が息を切らし、必死に陽の背中を追う。

その腕には、特衛の監視を欺くためのハッキング端末が抱えられていた

「陽、少し落ち着きなよ。静かに進まないと、何が潜んでるか……」

春馬が周囲を警戒しながら、押し殺した声で陽を嗜める。

だが、3人の焦燥感は限界に達していた。

特衛のデータにあった『最終信号ロケーション』

2人が消えた座標は、まさにこの廃変電所のさらに奥深く、立ち入り禁止区域の先を指している。

「だってよ、ここに悠緋と蒼士がいるかもしれないんだろ！？一刻も早く見つけて、こんな薄汚い場所から連れ戻してやらねえと……！」

陽が焦るのも無理はなかった。

街を襲う怪人、仲間を戦死として処理した組織、彼等を信じられなくなった今、地上には、もう彼らの居場所などどこにもない。ここを突き進むしか、生き残る道はないのだから

「……あれ？」

先頭を走っていた陽が、ピタリと足を止めた。

ライトの光が照らし出したのは、通路を塞ぐようにそびえ立つ、シャッターだった。だが、それは鉄製ではない。

まるで生物の皮膚のように、無機質なグレーの粘液で覆われ、脈打つようにうごめいている。

「うわ、なんだこれ……。めちゃくちゃ気持ち悪いんだけど。……なあ、碧、これって地下の設備か？」

陽が嫌悪感を露わにしながら、ライトの光を這わせる。

「い、いえ……違います。この廃駅の設計図に、こんな隔壁はありません。それにこれ……」

碧が怯えながら手元の端末の画面を凝視した。

「……これ、怪人と同じ生体反応です。鉄のシャッターや壁の構造を取り込んで、無理やり怪人の肉体の一部に変質させているんだと思います……！」

「怪人と同じ反応って……じゃあこれ、生きてんのかよ！？」

陽が息を呑み、思わず一步身を引く。

「……奥へ進むしか……なさそうだな……」

春馬が青ざめた顔で、背後の暗闇を振り返る。

彼らが通ってきた階段の奥から、ずるりと、湿った音が聞こえ始めている。

排水溝から無色透明の粘液状の軟体生物が、音もなく静かに這い出し、彼らの退路を塞ぐように集まりつつある。

「チッ、追いつかれてたまるかってんだ！行くぞ！」

陽が先頭に立って、半開きになった隔壁の隙間へと滑り込んだ。

「陽、待って！」

春馬と碧が慌ててその後が続く。その瞬間だった。

ドンッ！！

「うわっっ！？」

背後で、地響きのような重い音が炸裂した。

3人が隙間を通り抜けた直後、頭上のコンクリートごと、巨大な肉の隔壁が音もなく急速に膨張し、落下して通路を遮断したのだ。

「陽！碧！！」

「春馬くん！陽くん！？」

シャッターの向こうとこちら側で、お互いを呼ぶ声上がる。

だが、その声は肉厚な壁に吸い込まれ、酷くもって聞こえる。

「くそっ、この壁、なんだよ！びくともしねえ！」

陽が拳で肉壁を殴りつけるが、弾力のある細胞組織に衝撃を吸収されるだけだ。

「……ダメです。これ、ただの物質じゃありません！どんどん膨らんでいって……自己増殖を始めています！早くここから離れないと、僕たちまで押し潰されて……」

碧の切羽詰まった叫びの途中、

ゴゴゴゴゴ……と、地底全体が身震いするような駆動音が響いた。

彼らが立っている足元の床、コンクリートの床だと思っていたそれは、実は巨大な軟体怪人の粘液に覆われた体壁だった。

床が斜めに傾き、液状化したコンクリートのように滑り出す。

「うわあああああああ！？」

抗えない重力と滑り台のような傾斜に流され、3人の身体は別々の暗黒のダクトへと滑り落ちていく。

懐中電灯の光が激しく回転し、お互いを呼ぶ声がどんどん遠ざかっていく。

引き裂かれた光の一切届かない、迷宮の奥深くへ。

3人がそれぞれの『檻』へと収容されたことを検知し、地下の制御中枢では、ハッキングされたホログラムモニターが点滅を始める。

『特級検体：個別分断完了』

■

「くそっ……！碧！春馬！！」

滑り落ちた先は、得体の知れない粘液がへばりつく暗い地下ダクトの底だった。

陽は乱れた息を整えながら必死に叫んだが、返ってくるのは不気味な水滴の音と、自身の声の反響だけだった。

（分断された……ッ！あいつら、どこに落とされたんだ……！？）

懐中電灯を握り直し、細い光の束で周囲を照らす。

壁も床も、まるで巨大な生物の腸内のように湿り気をおび、脈動していた。通信機器は圏外。焦る気持ちを抑えつけながら、陽はぬかるむ足を前へ進めた。

どこへ向かっているのかもわからない。ただ、仲間を探さなければという執着だけが彼を動かしていた。

どれほど歩いただろうか。カビと腐敗臭の混ざり合う濃厚な霧が、足元から立ち込めてくる。

そしてその暗がりの中、陽の足が止まった。

懐中電灯の細い光の先、うす暗い霧の奥から、ぬうっと姿を現したのは、異常に背が高く、陰気な雰囲気纏った男だった。分断された暗闇の奥、カビ臭い空気の中に、そいつは最初からそこにいたかのように佇んでいた。

「っ……、お前は……………！？」

長い四肢を不自然に折り曲げ、酷く猫背でこちらを見下ろしている。

猫背であるにもかかわらず、ゆうに二メートルを越える巨大な体躯は、人間の形を模した明らかな異形だった。

病的なまでに青白く、肉が削ぎ落とされたように骨ばった長い輪郭。

その歪で陰鬱な顔がヌッと霧を割って視界を覆い、蛇のように細く裂けた縦長の瞳孔が、じっと陽を捕らえて放さない。

だらりと頬に垂れ下がる、脂ぎった長い黒髪の間から、その爛々と飢えた瞳が狂気を孕んで光っていた。

男が、ボソボソと呪怨のような擦れ声で呟く。

『……みつけた……………』

ヤバイ、と陽の本能が最大級の警鐘を鳴らす。

男が骨ばった細い指をピクリと動かした瞬間、地表が、コンクリートの床が一斉に牙を剥くように盛り上がり、陽の身体を叩き伏せた。

衝撃を自覚する間すらなかった。

視界が上下に激しく反転し、強烈な圧迫感とともに肺の空気がすべて強制的に絞り出される。

「カハッ、あ、が……………っ！？」

抵抗する間もなく、陽の視界は暗黒へと叩き落とされた。

●巨蛇に開かれた純潔【処女開通/腹ポコ/潮吹き】

朦朧とする暗闇の底で、じわじわと、細胞の鳴動が、陽という人間のカタチをぐにゃりと歪ませていく。

ドクドクドクドクドクドクドクドクッ！！

全身が酷く脈打っている。

心臓が破裂しそうなほど早鐘を打ち、血液が沸騰しているかのように熱いのに、指先一つ動かない。

首から下の感覚が遮断されたように、己の肉体が制御を失っていた。

体内のすべての細胞が強制的に破壊され、別のナニカへと組み替えられていく、強烈な炎症のような拒絶反応。

あまりの熱量に意識の芯は溶かされ、陽はすんなりと、再び深い闇の中へと沈んでいった。

ぐじゅっ、ぐじゅっ、ぐじゅっ、ぐじゅっ……

ずっと身体が熱い。腹の中が、かき回されて、酷く痛む。

いや、痛みだけではない。

下半身がずきずきと異様に熱を持っている。

ぐぶっ、ぐぶっ、ぐぶっ、ぐぶっ……………！

「…………っ、ふ、あ…………あ…………ぐ、う…………？」

次に陽が意識を浮上させたとき、最初に感じたのは、尋常ではない下半身の重苦しさだった。

身動き一つ取れないまま、背後にいる『何か』によって強固に縛り付けられている。大きな生き物の気配。

状況を把握しようと、混乱しながらも自分の身体に意識を向けた、その瞬間だった。

身体を割り裂かれるような、体験したことのない痛みと共にせり上がってくる強烈な感覚、陽の背中が跳ね上がる。

「ひ、あゝっ、あゝ ああああああ、あっ！？あ、が、
ああああつつつつ！？」

はっ、はっ、はっ、はっ、息が荒くなる。

(な、んだ、これ)

ズグッ、ズグッ、ズグッとリズムカルに腹の中を杭のようなもので下から突かれ、内臓がせり上がるような凄まじい圧迫感に脳がパニックを起こす。

反射的に何が起きているのかを確かめようと、必死に首を巡らせて振り返ろうとした。だが、そうはさせてはくれない。

「……っ、あゝ …、うゝ、あああああ！」

陽の腹部を、がっしりと長い、5本指の、大きな両手が左右から鷲掴みにし、指先が脇腹の肉に食い込み、陽の小柄な身体をいとも容易く、まるでぬいぐるみでも扱うかのように上へと引き上げる。

破れたヒーロースーツからは胸元や下腹部が露出しており、むき出しになった股の間には規格外の肉根がそびえ立っていた。

陽はその瞬間、今現実には起こっていることを理解してしまった。

「っ、あ……え……？ ひっ……！ なにか入っ……あゝ ア、あッ！？」

己の身に迫る異次元の暴虐に、悲鳴を上げる。

「はなせっ、離せよおッ！いやだ、やだあっ、あああゝ あ
ああああ！」

正気を失ったように叫びながら、陽は両足を踏み鳴らすように
空気中でバタバタと暴れさせ、腹部を固定する異形の巨大な手
を両手で叩き、爪を立てて振り払おうと足掻いた。

だが、運動神経に長けたはずの陽の抵抗は、大男の圧倒的な剛
腕の前には羽虫の羽ばたきほどの意味もなさない。

腹を押し潰す強固な拘束は微動だにせず、むしろ足掻けば足掻
くほど、指先が腹の肉へと深く食い込んでいく。

「うゝ、あゝ ……っ、あぐッ、や、めっ……！」

逃げようと必死に腰を振らせ、手を押し返そうとする陽の無駄
な抗いを嘲笑うかのように、大男はその凶悪な先端を、すでに
作り変えられた『孔』の入り口へぐずうっ♡と埋め込んだ。

「ヒュっ……！？あが、ッ……あゝ っ、あああっ……！！」

後ろから覆い被さるように、肉の檻に閉じ込められ、座った姿勢のまま、そいつは陽の腹を掴んだ手を上下させた。

ズボツズボツズボツズボツズボツズボツズボツ！！

「あゝッ！あゝっ、あッ、アッ……、アゝ、っうゝ、あゝ、あゝ！！」

人間のものとは思えないほど太く、長く、禍々しい異形が、根元まで埋め込まれ、勢いをつけて引き抜かれる。それが何度も何度も繰り返される。

グボツ、グボツ、グボツ、グボツ、グボツ、グボツ、グボツ、グボツ！！

「あ、ぐ、うゝ、あッ、あゝっ、あゝ あああッ……！っ、あゝがー……ッ！！」

ガツガツと、と最奥を打ち抜くような猛撃のたび、腹が突き破られんばかりに引き伸ばされ、禍々しい肉根の『頭』がぐにっ♡ぐにっ♡と内側から皮膚を押し上げて隆起した。

陽の身体は、怪人の欲を満たすためだけの肉の性具へと成り下がっているのだと、本能が最悪の事実を突きつけてくる。

「……お前の、なか……はぁっ、はぁっ、ちいさくて、あったかい……」

背後にいる男の顔は見えない。

ただ、だらりと肩に落ちてくる長く脂ぎった黒髪感触と、首筋を這うようなボソボソとした呪怨のような呟き、底冷えするような陰気な気配だけが伝わってくる。容赦なく叩き込まれる激動に陽は、無意識に視線を落とした。

そこを凶悪な化け物のイチモツでズボズボと出し入れされているのだという悍ましい事実身に身を持って実感させられる。

己の下腹部が女のそれへと変化し、蜜孔に深々と大男のモノが激しく出入りしているのだ。

「あ、あ、あ……っ！な、い、俺の、……っ！あ、ぐっ、や、あぁ、あぁっっっ！！！」

「……く、ふふふっ、毎日お前を犯して、僕の子を産んでもらうんだ」

狙い澄ましたかのように、男の五本指が陽の腹部をさらに強く圧迫し、最奥の子宮の壁へと向かって、巨根が深く突き刺さる。

【続きは製品版をお楽しみください】